

「死と言語」

田島正樹

- 1) ニーチェ ハイデガーの「ニーチェ」は、ニーチェのパフォーマティブなテキスト論的問題を無視する。「位階」「高貴性」「誘惑・試み・選別としてのテキスト」
- 2) ハイデガーとの対決を考えるときの切り口として、「死」をとっかかりとする。
 - ・現存在の存在了解から存在一般の意味へという体系構成の要に「死」が置かれている。「死への不安」という形で。
 - ・「本来的」—「非本来的」の区別
 - ひとごとのように、他の事物的存在者のもとに投げられ、そこから自己を理解することを非本来的という。そこから死の本来的・非本来的理解の区別が出てくる。
 - ・自己の死へと先駆して、先取りして、先走って「覚悟する」ことが「本来的」
 - ・他者の死としてしか、死が問題として意味として立ち現れることはない。
 - cf. 生の全体性についてのクロイソス—ソロン¹の逸話。ヘロドトス『歴史』1巻30章「私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らすことのお好きなのをよく承知いたしております。…いかなる事柄についても、それがどのようになってゆくのか、その結末を見極めるのが肝心」(1・32)
 - テミストクレスの場合はどうか？ cf. 『プルターク英雄伝』「…殊に自分が挙げた功績と昔得た勝利と名声に伴う責任感から、自分の生涯に立派な結末をつけるのを最上のことだと考えて、神々に犠牲をささげ、友人たちを集めて握手を交わし、多くの伝えによれば牛の血を、またある人々によればその日のうちに効力を発する薬を飲んで、65年のしかも大部分政治と軍務に捧げたその生涯をマグネシア²に終わった。」
 - ・身代わりとしての死は、非本来的な理解にもとづくことになる。cf. プーランク『カルメル会修道会修道女の対話』コンスタンス・ド・サンドウニ[a la place des autres]
- 3) ハイデガーは自己の死を本来的とすることから、何を得、何を失ったか？
 - ・時間性—超越—志向性(意図性)の意味論
 - ・存在論としての貧しさ cf. アリストテレスとフレーゲの根本洞察——「言語のアプリア³構造を手掛かりに存在のアプリア構造を分節化すること」
- 4) 我々は他者の死から出発する。
 - ・言語発生論—死者の名としての言語言語は道具ではないし、そもそも必ずしも役に立つものではない。
 - ・言語・家族・掟(タブー)・神・殲滅戦争の歴史
 - ・述語の成立(隠喩からの)—隠喩はすべて真理の隠喩である。スフィンクスの謎は隠喩である。アポファンシス・ロゴスとアレーテイア

- ・構造主義的弁別特性としての記号への平準化
- ・「一者」をめぐる問題圏と「弁証論」

cf. アリストテレス『トピカ』「通念 [エンドクサ] から出発して推論する推論は弁証論的推論である。… [弁証論的推論を明らかにする仕事は] 個々の知識の最初の諸原理に対して有益である。… というのも原理はすべてのもののうちで最初のものであるが、個々のものに対する通念から、これらの原理は述べられなければならないからである。このことは弁証論に特有のあるいは固有のことである。なぜなら弁証論は吟味的で、あらゆる方法の諸原理に向かって近づく道をもっているからである。」(1・2)

「存在は一者に関して語られる。その一者とは、実体である。」『形而上学』4巻2章

「実体は反対をもたない」同14巻1章

「一つのものにはただ一つの反対があるのに、どうして一と多が対立しうるのか？」同10巻5章

- 5) 存在の理論的自在さ (存在を統一的に理解すること——身代わり・成り代わり)
「存在」は優れて**理論的な観念**である。「存在」は理論的**飛躍**をあらわす。言語は、そもそもはじめから不自然な飛躍として出現した。cf. 「数」、「色」、「場所」の場合
(←→現存在の前理論的存在了解)
- 6) 言語をもつ悲劇的存在——過剰な意味作用 過剰な欲望 不気味な存在
- 7) 語られた言葉の中に自己自身を同定すること (象徴的同一化)
——信仰は象徴的同一化を反復する。テキストの中に自らを見出すこと。

(チャート)

